

今月のことば

ごめんなさい

この一言が言えなくて

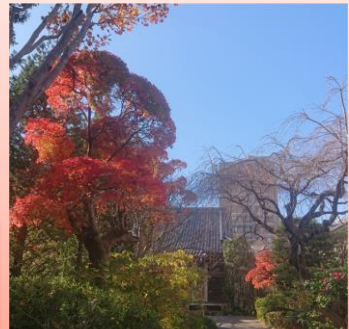
苦しんでいる このわたし

藤井理統

真宗大谷派長崎教区、西光寺さんの法語カレンダー（2010年2月）の言葉です。

ごめんなさいと頭が下がるのは、自分の姿に気づかされた時とも言えるでしょう。

境内の花々



もみじ

『徳泉寺報』
編集後記
一度に集まるのは
難しいですが、この
年を運みます。年中
思いますが、どうぞ
お越しください。

同朋会

十二月・一月 休止します

新型コロナウイルス感染予防のため、十二月と一月の同朋会を休止いたします。皆さんのお顔が拝見できないのは心苦しいばかりですが、またの再会を楽しみに、それぞれの場所で感染防止に努めましょう。寒い季節が始まります。どうぞご自愛ください。

十一月同朋会

住職法話一部抜粋「濁世の目足（じよくせのもくそく）」

私たちの生きている世界は濁（にご）りに満ちています。戦争や紛争、自然災害、思想や物の見方が邪悪になり、感情と利害ばかりが露出して歯止めが利かなくなります。そうして不健康になって精神や肉体も衰えます。また平均寿命がいくら伸びようとも成熟せず、人として生きる喜びが見いだせなくなります。こうした世界のことを仏教では濁世と言います。この濁世を生きるのに必要なものを親鸞聖人は「濁世の目足」と言いました。目とは仏様の智慧、足とは実践すること。念仏を称えることです。

私たちは煩惱をいっぱい抱えた愚者、凡夫です。その凡夫の目では世の中の濁りはなかなか見えません。私たちに命いっぱい生きよ、と願ってくださる阿彌陀仏の目をお借りすることで、命いっぱい生きたいと願っている私の本当の願いと、どこが濁っていて私が命いっぱい生き切ることが難しいのかが見えてくるということがあります。そして、そのことをなるほど、と受け止め『南無阿彌陀仏』『私は阿彌陀仏を拠り所として生きていきます』と声に出して称え、宣言することが念仏者の実践であり、この世を生きる足となるのです。

前住職法話一部抜粋「いつでもどこでもだれにでも」

私たちの宗派は浄土真宗です。これは浄土に生きる真実の生き方は何かということをお問いかけていく名告（のり）です。浄土とは死後の世界のことではありません。それは「いつでもどこでもだれにでも」通じる真実の法。真理が開いている世界のことです。お釈迦様の時代、親鸞聖人の時代、そして現代の「いつでも」インドでも日本でも世界の「どこでも」、お釈迦様でも親鸞聖人も私でも「だれにでも」等しく通じる法、真理。生まれた命はみんな生まれたからにはその命を精いっぱい生き切りたい。それぞれの命は自主独立していて、それでいて他の人とも仲良くできる。誰でも手を結んで私は本当にこの世に生を受けてよかったなあと思える。誰とでも手を結んで私は本当にこの世に生を受けてよかったなあと思える。納得できる人生を歩んでいける、そういう法が生きている世界を浄土というのです。

私たちは自分の都合で物事を見ます。自分の都合というフィルターを通してしか物事が見えないのでその物をありのままに見ることができません。が、阿彌陀の教えに触れ、法に目覚めると自我いっばいの私であったことに気づかされ、物があるままに、好き嫌いを離れてみるができるようになります。そうして信心を受け止めると、自分は少しも変えないで他を変えようとしていた私が、あるがままの状況を受け容れてしっかりと生きていけるようになるのです。